

## 吉本新喜劇における「型」をめぐる考察

## A Study on Patterns in Yoshimoto New Comedy

大谷 孝行

OTANI Takayuki

2019年に60周年を迎えた吉本新喜劇の舞台には、様々な相において決まった「型」が認められる。笑いという面から見たとき、決まった型を演じることはどのように捉えられるのかを考察するとともに、ストーリーの定型、ギャグの定型、役者の固有のネタという定型、という面から吉本新喜劇の特徴を明らかにした。特に2019年にテレビ放映された作品を中心に、3側面の型の具体例を列挙した。また、吉本新喜劇における「型」の重要性を傍証するために、2019年放映の20作品を取り上げ、一公演において起こった笑いの数、その笑いにおける定型的な笑いの数、一公演あたりの定型ギャグに関わる時間の数値化を試みた。

キーワード： 吉本新喜劇、型、定型、ギャグ、ネタ

## 1. はじめに

2019年に60周年を迎え全国ツアーも実施した吉本新喜劇。しかしその60年の間には、人気低迷して存続の危機に陥った時期もあったが、関係者の様々な努力と工夫によって現在でも活気のある舞台を日々披露している。吉本新喜劇は、大阪の人にとっては小さいときからテレビを通じて当たり前のように触れられている存在であり、大阪人の精神的形成において少なからぬ影響を及ぼしている。

「毎土曜日のお昼に放送されている吉本新喜劇（毎日放送）は、大阪の子供なら知らない子はいないのではないのでしょうか。子供の時からというよりも、幼児の段階から見て育ったと言う人がけっこう多いように思われます。」<sup>(1)</sup>

吉本新喜劇が「なんばグランド花月」、「よしもと西梅田劇場」、「よしもと祇園花月」で毎日上演、週替わりの興行という過酷なスケジュールの中で続けられる理由の一つは、吉本新喜劇の様々な相に認められる「型」にあるのではないだろうか。

本稿では、吉本新喜劇を成立させている主要な要素としての「型」の重要性について考察し、吉本新喜劇の魅力の一端を明らかにしてみたいと思う。

## 2. 笑いと型

「型」は日本文化を語る上での鍵になる概念である。日本の文芸では俳句、短歌の「定型詩」があり、また「道」と名のつく日本の芸道は「型」との親和性が強い。茶道、華道、書道、弓道、柔道、剣道、合気道などでは、まず形から入ることを指導され、その型を踏襲するところに伝統が成り立つ。芸能の分野でも、例えば古典落語には昔から決められたストーリーがあり、そこに演者の演技力という才能がモノをいうにせよ、ストーリーを外れた語りがされることはない。(2)

人がなぜ笑うのかという「笑いの理論」の一つに「ズレの理論」があり、日頃の常識や予想から外れたこと、ずれたことを体験したときに人は笑うという考え方がある。

「私たちは、安全に生きていくためには、秩序のある世界、共同生活をするための法律や規則、倫理、概念、常識など一定の約束事をもつことが必要である。約束事を予期して行動することによって、秩序が保たれるわけであるが、予期がはずれたり、意外な出来事に出会うと、私たちは笑ってしまう。」(3)

このズレの理論からすれば、予想していなかった意外性が笑いを生む要因なので、その意味では、予め知っていることはおかしさを減ずる要因となるはずである。自分で自分をくすぐっても笑えないのは、くすぐるタイミングやくすぐる箇所などを自分が知っているからである。

しかしながら私たちは、予想がつくのに笑う場合がある。かつて聞いたことがあり、話の「オチ」やネタを知っている落語や漫才を聞いても、やはりおもしろくて笑う。

吉本新喜劇では、演者のギャグを観客が予め知っている場合がひじょうに多く、聴衆にとっては馴染みのあるギャグで、初見ではないという意味では新鮮味が乏しいものであっても聴衆は笑う。ズレの理論だけで考えれば、初見の場合には常識とのズレの大きさと笑っていたギャグも、何度も接するうちに慣れが起こって笑いの程度は下がるはずなのに、そのギャグ自体のもつ面白さに誘発されるためだろうか、私たちは笑ってしまう。

笑いにおける既知性と意外性との関係は複雑で、簡単には説明できないものであろう。例えば、旧友と偶然街中で出会って喜びの笑顔がこぼれるとき、既にその人物を知っていることと、予想していなかった場所やタイミングで偶然出会ったという意外性がともに存在する。また、テレビで偶々自分の身近な人物や場所が映像で流れると嬉しくなるが、ここにも既知性と意外性が関係している。

日頃テレビで知っていた吉本新喜劇の定番ギャグを劇場で体験する場合には、既知性が大きく意外性は乏しいはずであるのに、劇場は爆笑の連続である。その理由としては、テレビ等で知っているギャグを、劇場で生で見聞きすることによる意識の高揚感があるかもしれないし、周りの観客につられて自分も思わず笑う会場の一体感があるかもしれない。既知のギャグでも笑いが起こる主たる理由が、そのギャグ自体のもつ面白さ、愉快さ、滑稽さだけによるものなのかは、更なる考察が必要だろう。以下では「型」どおりのギャグでも観客の笑いを勝ち得ている吉本新喜劇の「型」の諸相について、具体的に述べることとする。

### 3. 吉本新喜劇における「型」

吉本新喜劇の公演においては、様々なレベルにおいて決まったパターンが存在している。そのレベルをストーリーの定型、様々な演者によって共通に演じられるギャグの定型、役者の固有のネタという定型、という面から列挙すると以下のようなになる。(4)

#### ① 筋（ストーリー）における定型

- ・舞台は、メイン級ではない比較的若手の役者でスタートすることが多い。メイン級の役者は初めから登場せず、遅刻して現れることが多く、遅刻について訳のわからない言い訳をする。
- ・舞台が食べ物屋や旅館の場合、劇の多くは客同士の会話から始まる。その際に客から美貌を褒められた従業員が、うれしさのあまり客をお盆で音が出るほど叩く。
- ・カップルの男性客が連れ的女性にプレゼントするが、女性はいやいやと言いつつ、そのプレゼントを邪険に扱う。
- ・作品全体の内容として、親子の情愛や夫婦愛を扱ったものが多い。夫婦の場合、夫が仕事に忙しくて家庭を顧みず、妻との関係が冷え切っていて、別居中であったり離婚したりしている。そしてストーリーの展開とともに、夫が反省し、今後は家庭を大事にすると心を入れ替える。親子の場合は、子どもが親と別居か死に別れている。反省はBGMとともに語られ、しみりとした雰囲気になる。(5)
- ・作品の終盤で詐欺師や逃走犯がナイフなどで登場人物を人質にとる。そして、その犯人から人質を守ろうとして、人質の夫、恋人、親などが犯人に立ち向かっていく。
- ・辻本茂雄演じる茂造が登場する公演では、大掛かりな舞台装置が駆使される。舞台設定は旅館やホテルで、2階への階段が辻本の動作で一瞬のうちに滑り台に変わり、登場人物が滑り落とされる。また、フロアからの出口扉に、辻本の動作で上から鋭い刃が落ちてくる。さらには、ストーリー終盤で、壁から巨大な仕掛けが飛び出て来て、犯人一味を驚かし逮捕につながる。
- ・話は基本的にはハッピーエンドで終わり、劇を見終わった観客が嫌な気分にならないような配慮が働いている。(6)

#### ② 多くの演者によって共通に演じられるギャグの定型

吉本新喜劇では必ずしも同一人物によって同一のギャグが使われているとは限らず、複数の役者によって同じギャグが演じられることもある。以下にそのようなギャグを列挙する。

- ・誰かが定番のギャグを言ったときに、周りがオーバーにコケる。(7)
- ・劇の冒頭部分で、旅館の従業員が美容に良い水を客に提供し、「私もきれいになるかな」と言った年配客に「個人差があります」と答える。
- ・チンピラが「じゃまするで～」と言いながら登場した際に、「じゃますんなら帰って～」と言われ、「あいよ～」と言いながら帰る。
- ・トイレに行きたい登場人物が舞台から立ち去るとき、「アッ」と言ってからニコッとし、「もらしたな」というツッコミの声上がる。
- ・警官（警備員）が犯人を前にして「警官（警備員）を呼んできます！」と言って逃げる。

- ・警官が犯人を逮捕し罪状を説明する際に「なんやかやで逮捕する」と言う。
- ・警官が犯人に手錠をかける際に、手錠を犯人に渡して「自分でやれ！」と言う。渡された犯人も素直に自分で手錠をはめる。
- ・ダンスがうまい登場人物がダンスを披露した後で、ダンスの下手な人物がぎこちなく踊る。
- ・何人かで動作の緩慢な下手なダンスを踊った後、皆息を切らせてバテ、「しんどいダンス、ちゃうやろ！」とつっこまれる。
- ・人質を取ってナイフなどで脅している犯人をよそに、他の登場人物が持ちネタを披露し、犯人がたまらずに「お〜い！」「こっちはほったらかしかい！」などと叫ぶ。
- ・犯人と他の登場人物とのやり取りが BGM とともに急にスローモーションで演じられ、犯人の放つピストルの弾丸を避ける。
- ・バラしてはいけない秘密をベラベラとしゃべってしまい、その後自ら「ほら、バレた！」と言う。
- ・夫婦喧嘩を仲裁しようとしていた人物が、間を仕切った後に「ファイト！」と言ってまた喧嘩を仕掛けようとする。
- ・危機的な状況の中で嘆いた登場人物が言う「なんてこった、パンナコッタ」。

### ③ 役者固有の持ちネタという定型

吉本新喜劇は登場人物個々の持ちネタにひじょうに大きく依存している。全役者がそれぞれ固有のネタを持っており、役者の強烈な個性が吉本新喜劇を成立させている。(8)

公演では、役者のオリジナルなギャグが数多く演じられ、「この人にはこのギャグ」というように、ギャグがその人物の代名詞となっている。中には、その人物だけに観客の注意が一定時間引き付けられるような、いわば独演の様相を呈するギャグの時間帯も存在する。まさに型通りのギャグであり、役者への帰属性が強いネタである。

以下に新喜劇の主な役者（五十音順）とその定番ギャグを紹介する。

**アキ** 「いいよ〜」と優しい口調で言う。辻本の「スイマセン」というセリフに対する返事として語られる。音楽が鳴り出すと急に踊り出し、その音楽は辻本の携帯の着信音という設定で、かなり長く踊った後、辻本の「もしもし」で皆がずっこける。

**浅香あき恵** 他の登場人物から「ブッサイクやな〜」と言われ、「オーマイゴッド」と言った後、毒づき、「怒るで〜」と横山やすしの真似をする。その後、そう言った人物に対して「だれ一、だれ一？」とけたたましい声を上げながら指差す。

**伊賀健二** 横顔が新幹線に似ているので、新幹線にまつわるギャグ。

**五十嵐サキ** 肥満体型であることから、辻本に「ゾウアザラシ」とつっこまれ、辻本の「アア〜」という呼び声に「ア〜ア〜！」とゾウアザラシの鳴き声で応答する。

**池乃めだか** 背が小さいため登場したときに周りから気づかれぬ。声の聞こえる方に集まると言ってから「見下〜げてごらん」と歌い、下を見た登場人物たちが「ワッ」と驚く。説教を始めて最後に自分の頭を撫でながら「寺へ帰ろう」と言って「ハー、ハー」と笑う。（おそらく『男はつらいよ』の御前様の真似。）猫がボールにじゃれつく真似。チンピラを相手にネクタイを取って戦うフリをしてから、ネクタイを頭から下げて「長さが一緒や！」。

**今別府直之** 乳首を触れると「ピッ」と言って反応し、4回触られると変な動きをする。また大げさに「なんでやねん」と言う。

**烏川耕一** 唇が口笛を吹くように突き出ていることをいじられ、「ちくわをくわえている」とからかわれる。正面から見ると顔が車のアルファードに似ているとも。

**内場勝則** 異常な事態が発生したときに、特に驚くこともなく淡々と行動するが、少し時間が経ってから、正面を向いて力んだ声で「イ〜ッ」と叫ぶ。サングラスをかけた姿で登場し、サングラスを外すと別のサングラスをかけている。

**岡田直子** 早口でまくしたて、叩かれると両手を広げるポーズをとる。また容姿はブサイクをネタにされる。

**帯谷孝史** 顔が湯沸かしポットに似ているため、ポットと間違えた他の登場人物から頭を押される。

**川畑泰史** 登場するときの定番のメロディーと正面を向いての「カーッ」。また、他の登場人物から名探偵コナンの「元太（ゲンタ）くん」に似ていると言われる。他から最も多く言われるギャグは「顔パンパン」。周りから馬鹿にされていじられるギャグが多い。自分が殴られる状況ではない場面で、誰かの代わりに殴られる。

**小西武蔵** クイーンのボーカル、フレディ・マーキュリーの真似。

**小藪千豊** 「殺人、強盗、放火、恐喝・・・以外は全部やってきた」。

**酒井藍** 「指切りゲンマン」を新しいメロディーで歌う。外国人の座員ジャボリとの掛け合いでは英語でしゃべった後、「何て言っていたんですか？」と問われて「わからへん」と答える。

**島田一の介** 登場したときに可愛らしい声で「おじゃまします」と言う。（かつての南洲太郎という芸人のギャグに似ている。）

**島田珠代** 「ハイ、ハイ、ハイ」と言いながら元気よく登場し、足を交差させて「こんにちは〜」と体を折り曲げる。男性に近づいて「好き〜」と寄りかかる。男性の背後から顔を出してだんだん下がっていき、最後は男性の股下から顔を出す。男性の傍らで顔をずり下げていき、最後は男性の股間で指を弾いて「チーン」と言う。自分から男性の手をとって背後から自分を押さえつけさせながら「離してよ〜」と言う。

**清水啓之** スーツの上着を脱ぐと下にはよだれかけを着ている。どこで買って来たかとたずねられ「西松屋」と答える。

**ジャボリ・ジェフ** 登場するなり英語でまくしたて、英語を話せず困った相手に対して「日本語しゃべれるよ」と言う。大阪弁を流暢に「えらい、すんまへんな〜」などと話す。

**末成由美** 登場のときの定番が「ごめんやしておくれやしてごめんやっしゃ〜」。円盤のようなカツラをかぶっているため、『千と千尋の神隠し』の「湯婆婆に間違えられる」。「アホちゃ〜う」。ケツを突き出して退場する。「ミスユニバース」ネタでは、周りからは「ユニットバス」、「失敗のミス」、「病気を競う」と馬鹿にされ、その都度高い声で「イッ」と反応する。「ハッ、ハッ、ハッ」と笑いながら「ハッ・ヒッ・フッ・ヘッ・ホッ」と続ける。

**すっちー** 登場して間もなく会場に向かって飴を投げる。誰に投げているのかと問われて「芝犬」などと答える。吉田裕との乳首ドリルは、関西では知らぬ者がいないほど有名なギャグ。

**瀧見信行** 容姿が『千と千尋の神隠し』のカエルに似ている。カエルのセリフ「手を出せ、手を出せ」の真似。すっちーとの掛け合いでは、カエル物真似を何度か制止された後に披露して、「ホラー！」と馬鹿にされる。

**中條健一** 全身緑の服装で登場し、「アスパラガス」などと揶揄される。

**辻本茂雄** アゴが出ている容姿からアゴのギャグが定番。茂造役で登場するときには以下のような定型ギャグがある。遅刻の言い訳。宿泊客のバッグを蹴りあげる。「つまらない物にはキーク！」。客に鍵を渡すときの「〇〇の間(ま)」。「お前誰や？」と問われて、「アルバイトの茂造や！」と偉そうに答える。また雇い主に「君も頑張りたまえ！」と上から目線で言う。

**野下敏規** マッターしたしゃべり方で「すいませえ〜ん」。

**松浦真也** ギターを使った歌ネタ。チンピラや警官などの役として登場し歌いながらセリフを言う。

**Mr. オクレ** 登場の際、消え入りそうな声で言う「こんにちは〜」、舞台からはけるときに言う「アホ〜」。また真剣な内容の話を半笑いで言う。

**未知やすえ** 美しいと褒められると、手、ひざ、おでこをリズムカルに叩きながら喜びを表現する。また「白ぶた」と言われると「おんどりゃ〜」とキレて毒づき、最後にかわいらしく「怖かった〜」とぶりっ子する。

**森田展義** 「〇〇なんですすね〜」と体を斜めに傾けながら言ったあとで、「ハーイッ！」と元気よく発声。

**諸見里大介** 滑舌の悪さが定番ギャグで、登場して「シャ、シュ、ショ・・・」。「僕、滑舌悪い？ 初耳〜！」。「新春シャンソンショー」をセリフに入れ込む。

**安尾信乃助** セリフの文末に「か」をつける、つけないのギャグ。「みなさーん、お元気です」「すいませでしたか」。また全てに濁点をつけてしゃべろうとする。謝罪するときに、手をばたつかせて「コウノトリです。いや、このとおりです」と言う。

**山田花子** 容姿がバカボンに似ているため、「バカボンや！」と呼ばれる。また「汗ばむわ」「カモン」が決まり文句で、かつては山田花子自身が演技していたが、最近ではセリフを山田が言い、小西武蔵がジェスチャーをするパターンが多くなっている。

**吉田裕** すち子との「乳首ドリル」は有名。容姿からは「マキバオー」と呼ばれる。

**レイチェル** 他の人の写真を撮るときに歌とダンスを始め、ポーズをとりながらいきなり「チーズ！」でフラッシュをたく。また、チンピラ役で誰かをおどすときに、歌いながらパンチを食らわそうとするが寸止めで殴らない。うれしそうにまくしたてながら最後に誰かに寄り掛かって「楽しい〜！」と言う。

**若井みどり**。登場の際に「おじゃまパジャマ」。

以上は特定の個人の持ちネタとして、ほぼ毎回、同じようなセリフと動きで再現されるものであり、その役者個人への帰属性が強いギャグである。特に登場の際に語られるギャグは、その役者の自己紹介の口上のようなもので、ギャグが終わるまでの間、他の役者は舞台の背景に退いている感があり、演じる役者の独演がクローズアップされる。

「台本はあるのであるから、台本上の役を演じながらも、役者は自らの“地”で演ずるのである。台本もそういう“地”を見こして書かれるのであろう、役者の個人的持ち味をふんだんに生かした役の設定となっている。」(9)

また吉本新喜劇の「型」には、登場人物のイメージから連想される言葉を周りが発したり、そのイメージにそった行動をとったりすることによって演じられる定型的なギャグもある。以下はその代表的なものである。

**浅香あき恵** 「ブサイク」という定型的なイメージがあり、そこから化け物、妖怪、汚い、くさい、などの連想が生じギャグとして使われる。

**内場勝則** 私生活において実際の妻である未知やすえに頭が上がらない恐妻家というイメージがある。未知やすえと共演する舞台では、未知から家庭での実生活の不満ととれるぼやきがしばしば語られる。

**岡田直子** 容姿から「ミニヨン」、「仲本工事」と言われる。またブサイクに関わるネタ。

**川畑泰史** 「顔パンパン」とからかわれることが定番ギャグだが、顔の形からの連想として「おにぎり」や「ぼたもち」、「お尻」。

**酒井藍** 体型からのイメージとして「デブ」、「ブタ」、「相撲取り」、「大きい」など。

**島田一の介、もりすけ** 頭がハゲていることから、「ツルピカ」、「ずるむけ」、「バーコード」、「カツラ」などの連想が定番ギャグとなる。

**Mr. オクレ** イメージは一言で言うと、生命力の希薄さ。そこから「半分死んでいる」、「葬式」などのセリフが他の演者から投げかけられる。

**若井みどり** 小柄で童顔なことから座敷童などのイメージ。また新喜劇の中で年配者であることから「葬式が近い」などのギャグも。

以上のように、吉本新喜劇では様々なレベルで作品を成立させているパターンが存在する。ここまで定型が多いということは、そのネタが惰性化し公演がマンネリ化する危険をつねにはらんでいることを意味するが、一方でマンネリ化に陥らないための努力がつねになされている。

例えば、演者たちは刺激的なパフォーマンスで笑いをとろうとする。彼らは、「人のやらないことをやってみせるとい精神」(10)と「サービス精神に富んだ猛烈な“ショーマンシップ”の精神」(11)の持ち主である。浅香あき恵や島田珠代の誇張された変な動き。アキのダンスや松浦景子、小林ゆうによるクラシックバレエのネタ。レイチェルのダンス、パーカッション、ラップのネタ。オペラの大塚滯。以上はその好例だろう。ただ定番ギャグだけが惰性的に繰り返されるならば、マンネリ化に陥って刺激の乏しい作品になってしまうが、これらのネタは、劇が沈滞化するのを防ぎ作品を活性化する。

「観客の注意をひきつけ、目立つことが出来るのなら何でもやってやろうとするわけであるから、目立たせようとする競争は熾烈である。」(12)

また、吉本新喜劇では、登場人物は役名でなく本人の名前で呼ばれる。つねに自分の名前で舞台上に上がり固有のネタを演じる。演じる座員たちの側からすれば、公演ごとに登場人物の役名を覚えなければならない手間が省けるし、公演前の事前の打ち合わせでも場面をイメージしやすい。

本稿の冒頭で指摘したように、吉本新喜劇が3つの劇場で毎日、週替わりというタイトなスケジュールで公演可能なのは、ストーリーや個々の役者の演技に共通の型があり、それが複数の作品に共通に使われること、また登場人物がつねに自分の名前で演じることによって、通し稽古に割かれる時間が短時間で済むからである。(13)

#### 4. データから見る吉本新喜劇

これまで述べた吉本新喜劇における「型」の重要性を裏付けるために、作品における「型」をめぐる笑いの数値化を試みた。今回考察の対象とした作品は、筆者の居住地である富山県のテレビ局、チューリップテレビで2019年の6月から10月にかけて放送された以下の20作品である。

「隣の芝生は、半分青い。」、「諸太郎の、家族の絆を大手術!？」、「父の想いは、ゴリ霧中!？」、「後悔しないやつらの航海」、  
「すち子の大豪邸！サスペンツ劇場」、「おしみの家具屋でGO!」、  
「妹思いは荷が重い!？」、「すち子の、10年目の浮気」、  
「恩返しは突然に」、「博士の最後の発明」、  
「すち子の、ウチはなにわの取り立て屋」、「茂造の、ファーザー・ファーザー」、  
「藍五郎の、ハッピーな誕生日かい?」、「シゲオとアキコのアンビリーバボー!」、  
「幽霊の子!？」、「すち子の、無人島サバイバル」、  
「更生するならこうせい?」、「島が生んだ大きな愛」、  
「同窓会はどうしょーかい?」、「お見合いの相手はお嬢…様?」。

以上の作品の中で、次の要素をカウントした。

- ・一公演において起こった笑いの数
- ・全部の笑いの中で定型的な笑いがしめる数
- ・一公演あたりの定型ギャグに関わる時間

笑いが1回起こったとする基準は、場内全体で一斉に笑いが起きたときであり、場内の一部で起こった小さな笑い声はカウントしていない。

笑いが「定型」であるとする基準は、そのギャグがその作品だけで披露されているばかりでなく、他の作品でも使われているギャグであること。つまり複数の作品でそのギャグが認められることとしている。したがって、本稿で筆者が定型としていないギャグでも、筆者が把握していない作品でそのギャグが演じられている可能性を否定できないため、その場合には本稿における定型の笑いのカウント数や、定型の笑いの占める時間数はより大きくなる。

また時間の計り始めと計り終わりの方法については、一連のセリフに続いて最後に定型的なセリフや行動で笑いが起こった場合、セリフの最初の部分から計測を始めている。例えば、川畑泰史に登場人物が毒づいて、最後に「顔パンパン」と言うときには、毒づき始めた時点から計測している。一公演約45分の中で、どのくらいの時間が型通りのギャグを引き出すためにセリフや動作に充てられているのかを数値化した。

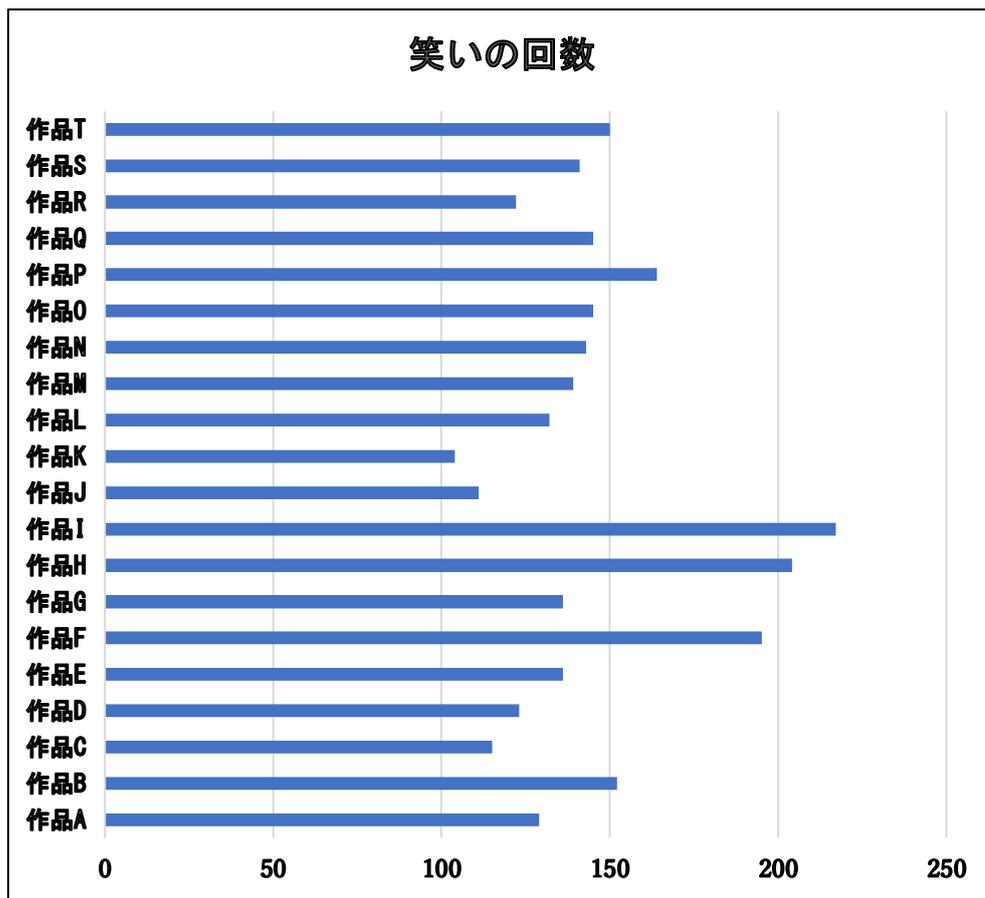
なお、作品名A～Tの順番は、上記の作品名の順番と同じではない。

笑いの回数

一回の公演あたりに何回の笑いが起こったかを作品ごとに示した数字が以下である。最も多いのが 217 回、最も少ないのが 104 回。公演時間を 45 分とすると、前者ではおよそ 12 秒に 1 回、後者でも 26 秒に 1 回、笑いが起こっている結果となった。

作品名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
笑いの回数	129	152	115	123	136	195	136	204	217	111

作品名	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
笑いの回数	104	132	139	143	145	164	145	122	141	150

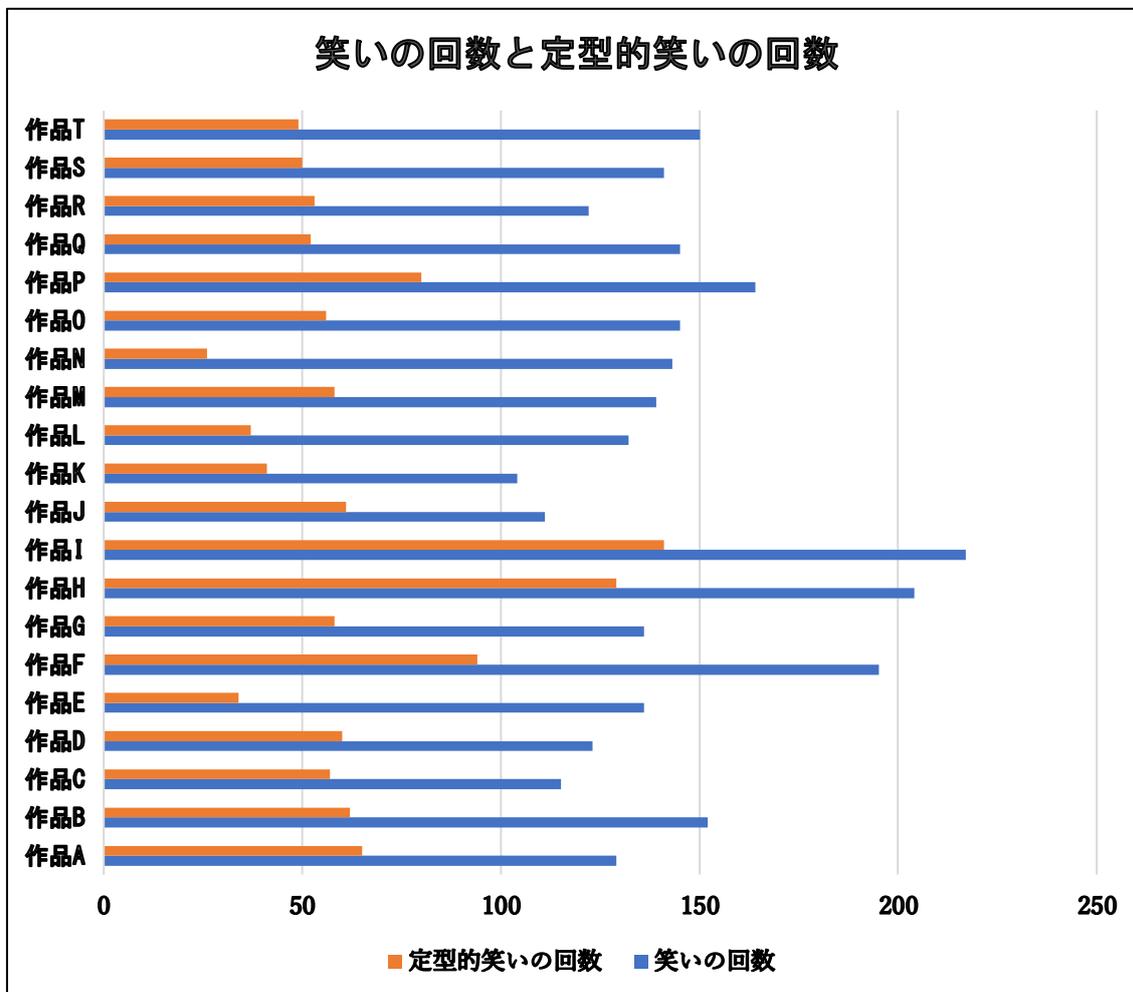


定型的笑いの回数

笑いの全回数のうち、筆者が定型と定義した笑いの回数を示したものが以下である。最も多い定型的笑いの回数は 141 回、最も少ないのは 26 回。前者で約 19 秒に 1 回、後者では約 104 秒に 1 回のペースで定型の笑いが発生している。

作品名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
笑いの回数	129	152	115	123	136	195	136	204	217	111
定型的笑いの回数	65	62	57	60	34	94	58	129	141	61

作品名	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
笑いの回数	104	132	139	143	145	164	145	122	141	150
定型的笑いの回数	41	37	58	26	56	80	52	53	50	49

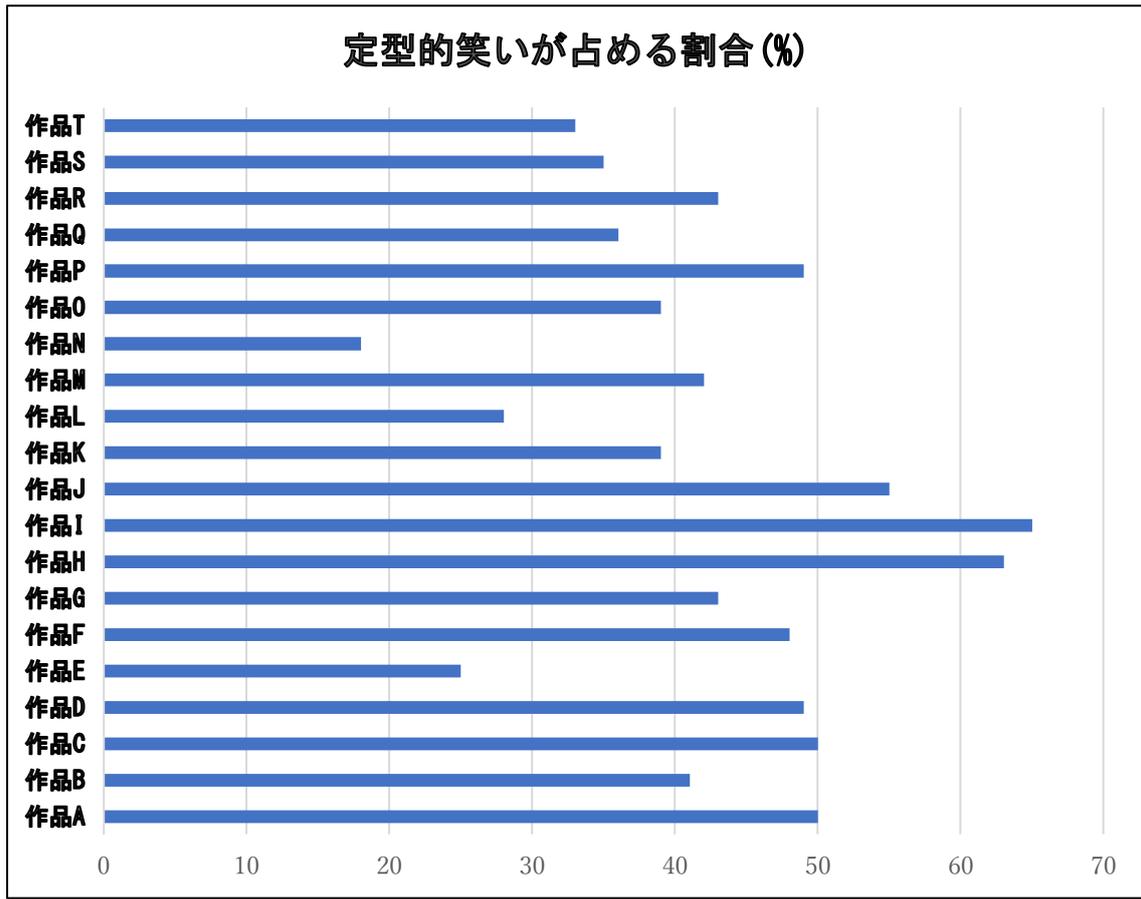


定型的笑いが占める割合

起こった笑い全体の中で定型とされる笑いの割合を示した数値が以下である。最も多い作品で65%、最も少ない作品で18%という数値結果であった。20作品において数字にばらつきはあるが、吉本新喜劇に占める定型的笑いの重要さは再確認できるだろう。

作品名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
定型が占める割合 (%)	50	41	50	49	25	48	43	63	65	55

作品名	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
定型が占める割合 (%)	39	28	42	18	39	49	36	43	35	33

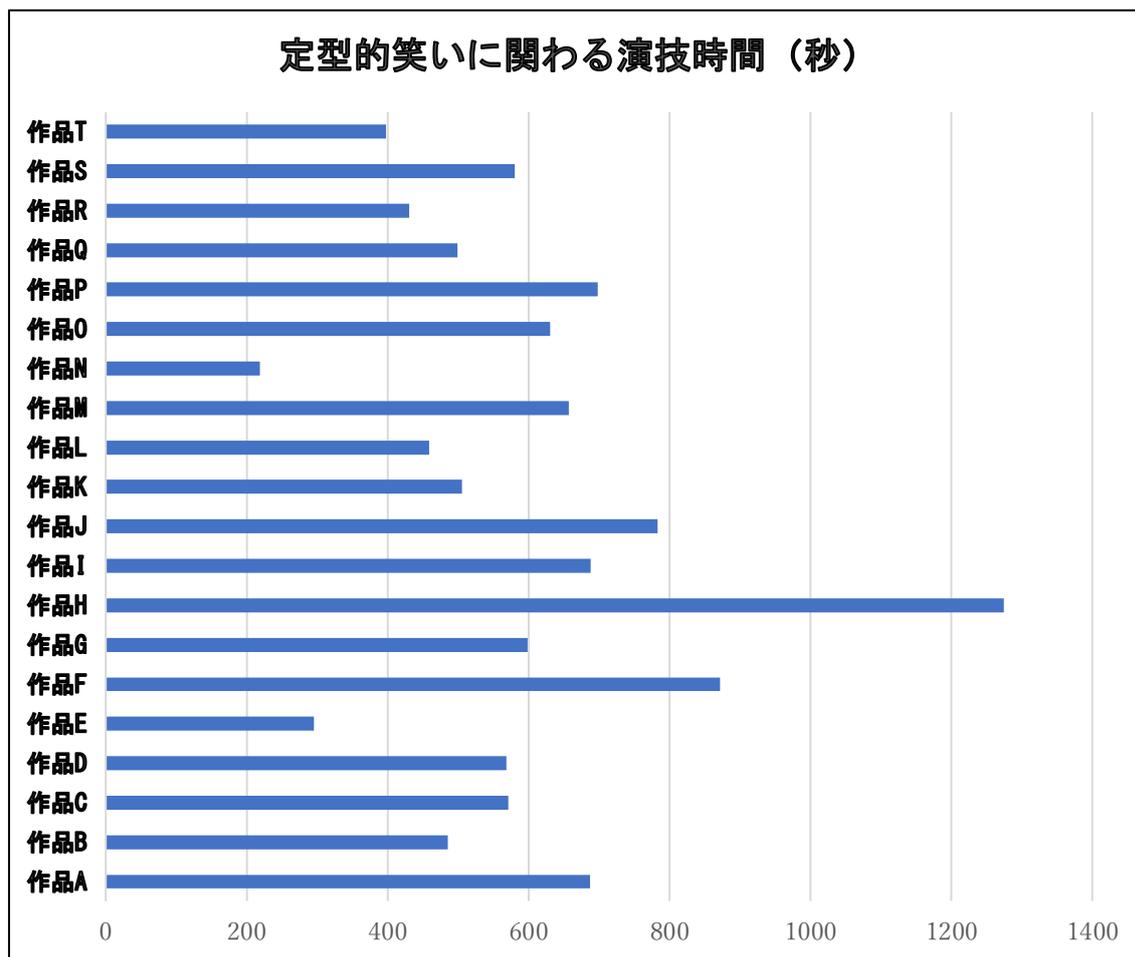


#### 定型的笑いに関わる演技時間

定型的な笑いが発生する際に、その笑いを生み出すために演じられた時間を秒単位で示した数値が以下である。最も多い作品では 1274 秒 (21 分 14 秒)、最も少ない作品では 219 秒 (3 分 39 秒) だった。前者の場合、公演時間のおよそ半分が定型的笑いに関わる演技時間ということになる。

作品名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
定型的笑いに関わる演技時間 (秒)	687	485	571	568	295	871	598	1274	688	783

作品名	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
定型的笑いに関わる演技時間 (秒)	505	459	657	219	630	698	499	430	580	398



以上、20 作品という限られた数ではあるが、吉本新喜劇の定型的笑いに関わる数値を紹介した。前述したように、定型かどうかの判断は複数の作品で同じギャグが共通に演じられているかどうかである。筆者は吉本新喜劇の全作品を視聴しているわけではないため、定型的笑いに関わる上記の数値はいわば最小値であって、吉本新喜劇の全作品を視野に入れれば、複数作品にまたがる共通のネタ数は上昇し、上記の数値はさらに上がることになる。本稿では、吉本新喜劇における定型的笑いの重要性を指摘することが主眼であり、今回の数値でもその重要性は再確認できたのではないと思う。

また、吉本新喜劇の公演内容における定型は、必ずしも笑いに関わる演技だけに見られる特徴ではなく、シリアスな場面、緊迫感のある場面などにおいても定型的な演技は多く見られる。笑いに関わるかどうかを問わずに、単に定型という特徴だけで公演内容を分析すれば、その演技時間はさらに上昇するはずである。

## 注

- (1) 井上宏『大阪の文化と笑い』関西大学出版部、2003、p.197～198。
- (2) 本稿における「型」の意味については、「決まったやり方」という一般的で辞書的な意味で

用いている。

(3) 井上宏ほか『笑いの研究』フォー・ユー、1997、p.21。

(4) 列挙の基準となった吉本新喜劇の作品は、主として2019年の公演によっている。また、ある演技が「型」に則ったものであるかどうかの判断は、その演技が他の作品にも繰り返して披露されているかを基準にしている。そして複数作品に共通に見られるネタかどうかを判断する際には、筆者自身の視聴体験の他に以下を参考にしている。

『吉本新喜劇 60周年公式スペシャルブック』光文社、2019。

「よしもと新喜劇 bot」<https://twitter.com/shinkigekibot>

(5) 吉本新喜劇における人情劇の側面について、井上宏氏は次のように語っている。

「(吉本新喜劇においては一引用者) 時には松竹新喜劇の焼き直しではないかと思われる“人情劇”が見られる時がある。メロドラマさりながらのしみりと涙を誘う場面を設ける場合がある。吉本側の説明を求めてみると、古くは三十分でこなしていた芝居が、放送中継の都合で四十五分と延長させられた。全編ドタバタでは息が続かなくなったということ、それに役者が年をとって動かなくなったなどの理由が考えられると言う。」井上宏『大阪の笑い』関西大学出版部、1992、p.145。

公演中、少し前までドタバタ劇の様相だったストーリーでも、真面目で涙を誘うシーンが違和感なく展開されるのは、作品構成の巧みさと卓越した役者の演技力によるものだろう。

(6) 国民的映画『男はつらいよ』の最後のシーンが、日本晴れの中、寅さんの啖呵売の明るい掛け声で終わるように。

(7) 吉本新喜劇定番のギャグ、オーバーにずっこけるネタについて「これを始めた最初の役者は、笑福亭松之助であったという。」井上、前掲書、1992、p.133。

(8) 役者固有のギャグの特徴について、井上宏氏は次のように語っている。

「このドタバタ劇も吉本新喜劇の場合は、役者個人の“特別演技”によって彩られる。この特別演技は、個人をクローズアップさせ、目立たせる。何しろ彼らは目立ちたがりなのであるし、吉本新喜劇はそれを認めているのだ。」同上、p.139～140。

(9) 同上、p.142～143。

(10) 同上、p.134。

(11) 同上、p.135。

(12) 同上、p.138。

(13) 毎日公演、週替わり興行という吉本新喜劇の過密な日程を裏で支えている衣装担当の大槻忠之氏は次のように語っている。「座長さんと作家さんが作った台本をもとに打ち合わせをするんですけど、日にちがないんですよ。1週間もないですね。新しく作る衣装があるときは大変です。(公演に) 穴あけるわけにはいかへんから、どんなことがあろうと、絶対に間に合わさなあきまへん。それで月曜日の夜に劇場が空いてから稽古をやるんです。そこではじめて衣装を着てもらって、次の日には初日の本番を迎えます。普通の劇団では考えられないと思いますけど。」『吉本新喜劇 60周年公式スペシャルブック』光文社、p.18。